いずみさの昔と今 第330回

「泉佐野市の人口」

今回は近代における泉佐野市域の人口について紹介します。令和5（2023）年2月1日時点、泉佐野市は98，806人の人口を抱えています。これを明治9（1876）年の人口、17，429人（現市域の人口）と比較すると、約6倍に増加したこととなります。しかし、この増加は歴史的にも、地理的にも、決して一様ではありませんでした。

明治維新後、残されている史料から現在の市域内全地区の人口が明らかとなるのは明治9（1876）年が最初です。以後、総数は明治22（1889）年、明治39（1906）年に明らかになります。そこから明治年間の人口推移の傾向をみてみましょう。全体的に各地域の人口は停滞していましたが、まず旧佐野村だけは6，486人（明治9年）から7，268人（明治29年）になるなど、日清戦争の頃から他の地区に先んじて人口が顕著に増加しています。そして、日露戦争後の明治39（1906）年以降、泉佐野市域の人口は、徐々に盛んになった紡織を主とする工業の発達、またそれに伴う鉄道の発達により勢いよく伸びていくこととなります。

しかし、明治末を境に、この人口増加には地域差が生まれ始めます。旧佐野・北中通がどんどん発展する一方、長滝・上ノ郷・大土は停滞気味になってしまうのです。これは、日露戦争および第一次世界大戦による日本の工業的発展の時代に大きく関わるもので、各地域の間に経済機能の差異が起こったことをあらわします。

交通に恵まれ古くから商業の街としての性格をもっていた旧佐野・北中通は、明治末よりいち早く工業化・住宅地化が進みましたが、その他の地域はその後も長く農村として留まります。特に山間にある大土は、人口増加指数が地域において最低を示していました。

また、大正14（1925）年から昭和5（1930）年にかけて相次いで起った恐慌の影響についても、工業化の進んだ旧佐野・北中通には明瞭にあらわれますが、農村色の強い他の地域には大きな影響はありませんでした。一方で、大正末から、タオル工業の山手への浸透、および昭和5（1930）年の阪和線の開通により、農村部の中でも日根野・長滝の人口は堅実に増加していくこととなります。

以上のように、泉佐野市の人口増加には地域差がありました。それには、日露戦争前後からはじまる工業化の波や、交通の利便性等が大きく関わっていました。現在と同じく、近代における人口変動の理由には、泉佐野市域の地区毎に事情があったのですね。

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑮

～奉納弁財船（奈加美神社）～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

奈加美文化館の展示

中庄にある奈加美神社は、旧社は大宮神社という名前で、平安時代に創建と伝えられています。戦国時代末、天正５（1577）年には織田信長の根来攻めの際に焼失し、現在の本殿は、慶長15（1610）年に再建されました。三間社流造、檜皮葺きの極彩色の華麗な装飾が施され、府指定文化財となっています。明治41･42年頃に中庄、上瓦屋、湊の3村の字々の神社が合祀され、3村の頭文字を万葉仮名にして、「奈加美神社」と呼ばれるようになりました。

このたび1階展示空間が、日本遺産北前船のガイダンスセンター「奈加美文化館」として改修されました。主な展示には、湊浦の北前船主「新屋」が奉納した江戸時代の北前船の１/10模型船（全長2.5m、全幅68㎝）があり、本市の構成文化財となっています。この模型船は海をイメージした床の中央に浮かべるように配置され、今後、奉納弁財船の帆を復元する予定です。

また入口正面に見える壁面展示ケースでは、丸野輝雄氏寄贈の弁財船の模型も展示されています。丸野氏は、北前船、御座船、薩摩藩の軍船などを、資料を基に多数復元製作された全国的に著名な人で、このたび資料館改修に際し、ご家族から模型船を寄贈いただきました。